

隠されたものを見つける

「レシタティブ」における不可視の語り

河野 世莉奈

はじめに

トニ・モリスンは読者がナラティブへ関与することの重要性を、「見えないインク」という言葉を使って表現した。モリスンは、「見えないインク」で読者を呼び寄せ、テキストを意図的に不安定化させることで、語りを共同で作り上げる主体的役割を読者に求めてきた。

本論では、この戦略的な語りの技法が凝縮された形で表れている、モリスン唯一の短編「レシタティブ」を分析する。本作は、「すべての人種コードを取り除いた実験的小説」として知られているが、他の長編小説群と同様に、母娘関係や女性の葛藤、自己確立といった主題を内包している点で、モリスン文学の核心をなす作品でもある。不安定な主人公トワイラの語りによって不可視化されているものを浮き彫りにしながら、読者に「見えないインク」の解説を促す装置として機能する母親メアリーとマギーという二つの表象を考察する。

「レシタティブ」の特徴

モリスンはこの「レシタティブ」において、初めて「人種消去」の技法を取り入れた。主人公であるトワイラとロバータについて、「塩と胡椒」という比喻を用い、いずれが黒人でいずれが白人であるかを最後まで明示しない。この仕掛けによって、読者は作中に散りばめられた手掛かりを集めて、二人の人種を特定しようと試みるが、その行為自体が、読者自身の無意識な偏見や読みの癖を露呈させることとなる。

本作は、トワイラの一人称の語りによって進行し、記憶の揺らぎや語りの曖昧さが随所に見られる点に特徴がある。8歳の時に St. Bonaventure という孤児院で出会ったトワイラとロバータは、退所後に街中で四度におたって再会を繰り返すが、その中で反復的に語られるのが、母親と孤児院の台所で働いていたマギーという女性の記憶についてである。本論では、母メアリーに対するトワイラの複雑な感情を明らかにしたうえで、とりわけマギーを巡る記憶に生じるロバータとの決定的な齟齬に着目する。マギーに対するトワイラの認識の変遷を辿ることで、トワイラ自身のトラウマや抑圧された感情がいかに「見えないインク」としてテキストに書き込まれているのかを論じる。

トワイラの母親メアリー

物語冒頭で、トワイラは「私の母親は一晩中踊っていて、ロバータの母親は病気だった」と「母親」について唐突に言及するが、とくに「母親」がどんな人物であるのか、孤児院への入所の経緯については詳細には語らない。しかし、この冒頭の「母親」への言及は、作品全体における「母親」の存在の重要性を示唆している。

まず注目すべきは、トワイラが自身らを「死んだ立派な両親がお空にいる本当の孤児じゃないから」と繰り返し定義する点である。この語りからは、生きている母に「捨てられた」という現実が、幼いトワイラにとって拭い難い疎外感と惨めさの根源となっていることが読み取れる。この母娘関係の歪みは、孤児院へ入所してから初めての面会日に顕著に表れる。トワイラは母メアリーの場違いな「緑のスラックス」、ランチを持参しないという無頓着さに「殺してやりたい」ほどの恥ずかしさを感じている。しかし同時に、彼女はメアリーの美しさに「鼻が高かった」とも語り、自分を納得させている。ここからは、目の前の母親を受け入れようとすると同時に、見捨てられている現実をも受け入れざるを得ない、トワイラの愛憎入り混じる葛藤が見取れる。

さらに、トワイラが母メアリーを「まるで小さな女の子がお母さんを探しているみたいだった」と形容するように、作中では母娘の役割の逆転が示唆されている。礼拝中に悪態をつき、落ち着きなく振る舞うメアリーの手を強く握りしめ、必死に制御し、批判的な眼差しを向けるトワイラの姿は、トワイラの言語化できない母に対する「怒り」とどうしようもない「無力感」の混在を浮き彫りにしている。そしてトワイラが抱えるこれらの不安定な感情は、孤児院の台所で働く「マギー」という存在にも投影されていく。

マギー

トワイラはマギーを、話すことのできない、ペーヴェ色の肌をした、「子どもみたいな」格好をした女性として記憶している。この「子どもみたいな」という表現は、前章で論じた母メアリーの描写とも共通するものである。トワイラは無意識のうちに無力で声を持たないマギーの姿を、自分の渴望を満たしてくれなかった、他

者に対して悪態をつくことしかできなかつたメアリーのイメージと重ね合わせているのだ。

孤児院を退所後、ロバータとの再会を繰り返す中で、マギーの記憶は「転んだ」から「押し倒された」、さらには「トワイラが蹴った」へと変容し、トワイラの語りの信頼性は大きく揺らぎ始める。ここで重要なのは、マギーの人種が確定できないこと以上に、彼女がトワイラの抑圧された感情を映し出す「装置」として機能している点である。ロバータに糾弾され、自身の加害性の可能性を突き付けられたトワイラは、マギーを通して、内に潜んでいた「母性の欠如」への執着や自身が抱えるトラウマ的過去と対峙せざるを得なくなるのだ。

バス通学問題をめぐるロバータとの対立において、トワイラは自身の感情を他者の言葉によって初めて認識する未熟さを露呈する。「あんたは小さな孤児のままよ」というロバータの指摘は、トワイラが依然として母への愛憎から脱却できず、自己確立を成し遂げられていない現状を鋭く突いている。母メアリーとマギーという二つの表象に「子ども」というイメージを添え続けてきたトワイラは、物語の終盤において、マギーの中に「母」だけでなく、「自分自身」をも見出すことになる。

娘として、母として、一人の人間として

ロバータとの四回目の再会の前に、トワイラはマギーのことに思いを巡らせ、マギーを「蹴ってはないが、蹴りたかった」と語る。この告白は、これまで他者の言葉に依存してきたトワイラが初めて自らの内面から絞り出した主体的な言葉であるという点で極めて重要である。加えて、「夜中に泣いても聞いてくれる人はいなかった」というトワイラの述懐は、マギーの中に、かつての孤独な娘としての自分をも見出していることを物語っている。自分の内に潜んでいた欠如の感情と対峙したことで、トワイラの姿勢には明らかな変化が生じる。四回目の再会において、彼女はロバータに対し、「何も聞きたくない」と返し、マギーを巡る混乱に対しては「私たちは子どもだったのね」と語るのだ。これは、自身の未熟さとトラウマを客観視し、曖昧だった過去の記憶や罪悪感に一つの決着をつけた、一人の自立した女性としての宣言であると言える。

さいごに

本論では、トワイラの語りの不安定さに着目し、彼女が母メアリーとの関係において抱え続けてきた葛藤と、自己確立へのプロセスを考察した。マギーという存在は、テキストの空白を埋める「装置」とすると同時に、母メアリーとトワイラ自身の双方に重ねられる存在として機能していることが明らかとなった。読者に「見えないインク」の解説を促すモリスンの戦略的な技法は、記憶の齟齬や服装の描写といった断片的な要素の中に、登場人物の関係性や感情の揺らぎを浮かび上がらせている。本作「レンタティフ」は、モリスン唯一の短編ではあるが、その語りの技法とモリスン文学に通じるテーマが凝縮された作品であり、それを読み解くための重要な『鍵』となる作品である。

引用文献

Morrison, Toni. "Recitatif." 1983. Alfred A. Knopf, 2022.